遠洲櫻が池及び岡崎源空寺の傳說

石橋誠道

宗祖法然上人が天台の三大部六十卷を學び給ふた師範である功德院の皇圓阿闍梨が、遠江國櫻が池で大蛇となつて彌勒菩薩の出世を待たるゝといふ傳說は、古來有名な傳說であるから、今その事に就て、少し述べて見たいと思ふ。

この傳說は四卷傳、九卷傳、勅修御傳、十六門記、幷に了惠の知恩傳等にも記されてあるが、然し九卷傳が最も委しく述べられてある。この中最も古いと思はるゝ四卷傳は、記事が極めて簡明であるが、九卷傳になるとそれが大に敷衍されてあり、また新しい事實も加へられてある。今まづ四卷傳の文を抄出することゝする。四卷傳の第二に、

「肥後阿闍梨皇圓は、彌勒下生の曉を待たんが爲に、五十六億七千萬歲の間、遠江國笠原池に大蛇となりて住ふべきよし彼の領家に申し請ふて、誓にまかせて死後その池に住ふよし、時の人、遠近見知するところなり」と記されてある所がこれが九卷傳になると非常に敷衍されてある。即ち九卷傳の第二に、

功德院の阿闍梨皇圓、自身の分際を計り、たやすく此度生死を出べからず、もし度々生をかへば、隔生即忘の故に、定めて佛法を忘れんか、如かず長命の報を受けて、慈尊の出世に逢ひ奉らんと思て、命長きものを勸ふるに、鬼神よりも蛇道は勝れりとして、蛇にならんと誓つて、死期の時、水を乞ふて掌に入れて終にけり。その後皇圓阿闍梨、花山院大政大臣忠雅公の御許へ參りて、聊か申入るべき事侍りて參りたるよし申入ける間、人たがへにこそとて尋させられけるに、功德院の阿闍梨皇圓と申ものにて侍るよし重て申ける間、不審のあまりに出向て對向せられけるに、皇圓阿闍梨の條疑ひなき間、抑も御逝去のよし承り侍るはひが事にやと仰せられければ、闍梨の申さく、逝去は勿論なり、それ

に付て聊か所望の事あつて參り侍り、その故はたま〳〵人身を受くといへども、二佛の中間にさへ生れて、なほ生死に輪廻せん事の悲しく侍れば、長命の報を感じて慈尊の出世を待ち奉らんが爲に、誓つて蛇身を受る所に、大海は中天の恐あり、池にすまんとすれば、主なき所なし、遠江國笠原の庄は御領なり、かの庄に櫻の池といふ池あり、申あづかりて居所と定めて、閑に慈尊の出世を待ち奉らんが爲に、まいりて侍るよし申しければ、仔細に及ばずそれの心に有べしと御返事を承つて、たつと見るほどにやがて見えず成りぬ。不思議の事なりと口遊する所に、幾程の日數を經ずして、笠原の庄よりしるし申けるは、櫻の池に雨降らずして俄かに洪水出で、風吹かずして忽ちに大浪たちて、池の中の塵悉くはらひあぐ、諸人耳目を驚かすよし申入る。その日時を勘ふるにかの阿闍梨領家へ參りてこの池を申請ふて、罷り出ける日なり、誠に不思議の事なり、委しき事はかの家の記にあり、智惠のあるが故に生死の出で難きことを知り、道心あるが故に佛の出世に逢はんことを願ふ。然りと雖も未だ淨土の法門を知らざるが故に、かくの如き意樂の住するなりわれ其時この法門を尋ね得たらましかば、信不信は知らず、申し侍りなまし、極樂に往生の後は十方の國土に心にまかせて經行し、一切の諸佛を思ひに從ひて供養す、なんぞ必ずしも穢土に久しくをる事を願はんや、かの阿闍梨遙かに慈尊三會の曉を期して、五十六億七千萬歳の間、この池に住み給はんことを上人恒に悲み給ひき。當時に至るまでも、靜かなる夜は、振鈴の音聞ゆるとぞ申傳へ侍りける。上人悲みの餘りに、彼所へ下つて池の邊にのぞみて、稱名念誦懇ろに回向せられけり、一子平等の慈悲は薩埵の本誓なりといへども、累日斗藪の懇念は、凡夫の所爲にあらざらんをや」と記されてある。勅傳の記事もこれと殆んど同一であるがや、抄略されてある。

所が知恩傳の記事はや、趣がかはつてゐる、即ち下の如く記されてある。

久壽二乙亥八月の比皇圓闍梨入滅す。かの闍梨歎じて云く、われ圓頓速疾の教に逢ふと雖も、根機下劣にして行業疎なり、然れば現世の證入は叶ふ可らず、たゞ當來の得脫を期す可し、若し相似の益の如きは、生を隔つるも忘れず、名

字觀行の益は隔生即忘なり、今相似の益を得れば、隔生不忘なりと雖も、然れども吾等たちひ圓實の菩提心を發すの身なりとも、相似六根の益を得ざれば退不退知り難し、然れば長壽の報を減じて生を經ず、一世に彌勒の出世に逢ふて、無生を證らんには如かずといつて、蛇身を欣求し給へり云云」と云はれてある。

この記事に依て見ると、皇圓阿闍梨がいかに煩悶されてあつたかその有樣が能く解る。即ち自分は天台の大學者ではあるけれども、なか〳〵生死を解脫することは困難である、この生死の大問題は、どうしてもまだ解決がつかない。故に彌勒の出世を待つて、直接に彌勒の指示を受けて、そうして疑問を解決し修行を成就して、こゝに眞の解脫を得やうそれには長壽の大蛇となつて、隔生即忘の生死を離れ、一生に彌勒の出世に逢ふより外に道はなからうと思はれたから、である。この皇圓阿闍梨の煩悶と殆んど同じ樣な煩悶、即ち生死解脫の煩悶が宗祖にもあつたに違いない、それが宗祖の淨土開宗の基調をなしたものであつたらう。所が皇圓の此の記事が後には漸く傳說化せられて、その根本の求道の問題よりも、寧ろ皇圓阿闍梨が大蛇になつたといふやうな枝末の問題で花が咲いてしまつたのである。

而して皇圓入寂の年代に就ては諸傳に何れも記事がない。唯だ了惠の知恩傳には久壽二年の八月の頃と記されてあり勅修御傳の翼贊には一書に云く嘉應元年六月十三日の夜半と記して書名があげられてない。若し知恩傳の說に依つて久壽二年の命終とすれば宗祖の二十三歲の時であり、嘉應元年の入寂とすれば宗祖の三十七歲の時である。然しながら知恩傳は了惠の著述であり、時代から考へても勅傳よりも少し早く述作されたものであらうと思うから、久壽二年の說が正しいであらう。

さて又櫻が池の本房である應聲敎院の傳說によれば、法然上人は阿闍梨の寂後六年目、即ち治承元年に、御弟子二三人と共に遠州櫻が池へ御下りなさつて、皇圓阿闍梨に對面されたと傳へられてある。このことは九卷傳には、最も簡單に記されてある。

また義山の勅傳翼賛三十卷に、一書の說として左の記事がある、が然しその書名は記されてない。恐くは當時の傳說を記した書物に依られたものであらう。即ちその記事は下の如くである。

「一書ニハ七八箇年ノ後、上人門弟子四五輩ヲ召シ具シテ、カノ池ニ下リ給フテ彌陀經ヲ念誦シ給ヒケレバ、鱗生ヒ角ヲ頂キテ水上ニ浮ビ給フヲ、本身ニ復シ給ヘトアリケレバ、行法ノ體ヲ現シテ又浮ビ給フト。按ズルニ大師カノ池ニ下リ給ヒシ事ハ村民ノ口實今ニ傳ヘテ、時ニ六字ノ寶號ヲ書イテ人々ニ賜ハリシヲ、當時モ傳持シテ當國上馬ノ西傳寺ニアリトナン。又參河名號トイヘルモ此ノツキデニアソバシケルトナン申アヘリ、其餘ノ奇特ハ諸家ノ傳記ニハ記サレズ」と記されてある。

所が應聲教院の傳說に依れば、法然上人は治承元年の春、遠江國櫻が池の邊に下り、誦經念佛し給ふた所が、阿闍梨は元の僧形で忽然として水上に現はれ給ふた。そこで法然上人は暫くの間種々御會話の後、大蛇の形を現はし給へと願ひ給ふた。この時阿闍梨は、二十尋餘りの大蛇の身を現はし、黑雲を起し、火焰を出し、水波高く飛んで音をなし、實に物すごい光景であつた。その後法然上人は、この櫻が池から三里半程北の方にある、天台宗の天岳院に於て七日七夜の別時念佛を修行し、その天岳院を應聲教院と改稱されたと傳へられてある。而して今もなほ、毎年秋の彼岸の中日には、御櫃納の式典が盛大に行はれてある。即ちそれは、檜作りの曲物で高さ八寸五分、直徑一尺二寸の櫃に赤飯凡そ三升位を入れ、水練に達した村內の若者十五六名を選拔し、それらは七日七夜の間、精進潔齋して水垢離をとり、各の一個の櫃を持つて水面に浮び、櫃を浮べて池の中央に至り、雙手を以つて櫃を水中に押し込むの式である。これは蓋し大蛇に食物を進ずる意味が、遂に一種の祭式となつたものである。

而して又法然上人が、この櫻が池へ下り給ふ途すがら、三河國岡崎市能見の惠心菴に立寄り給ふて、一七日間念佛化導し、等身の像を刻み給ふて、留め置かせ給ふたから、後に此の菴を源空寺と改稱したといふ傳說がある。この傳說は

諸傳の中、何れの傳記にも記されてない。私は昨年の夏その源空寺に參詣して、この傳說を取調べたが、餘りに古い傳記はなかつた。但し宗祖の木像は大分古い樣にも見へたが、餘りに立入つた調査もしなかつたから、なほ確實にすることは出來なかつた。

我宗の寺院明細記として最も古い蓮門精舍舊詞の中に應聲敎院の事も源空寺の事も記されてないから、昔は餘りに有名でなかつたやうだ。然し或はその時の記載に漏れたものかも知れない。兎も角宗祖の御威德が各地に盛んに現はれて居ることを、吾々は深く喜ぶ次第である。